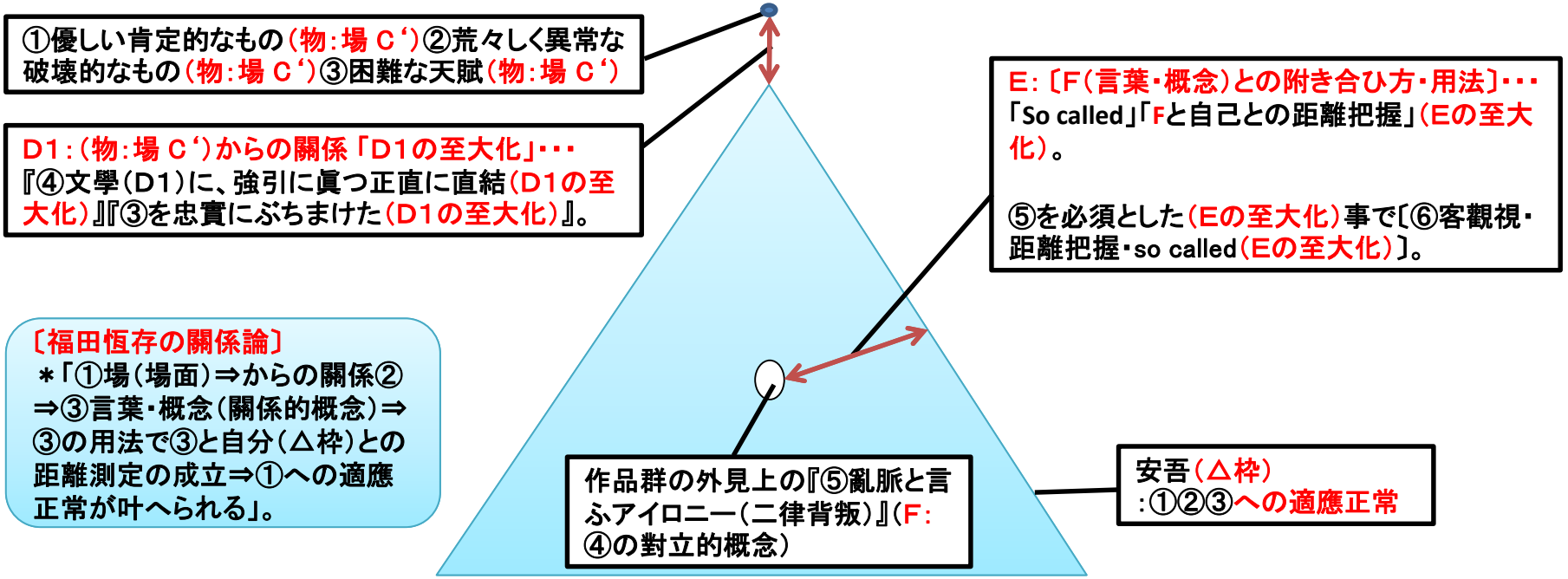
〔難解 小林秀雄には 恒存の關係論が最適〕
《小林秀雄評論『坂口安吾全集』(感想Ⅵ)》 :「亂脈(F) は、安吾の必須とした(Eの至大化)アイロニー(F:二律背叛) 」

＊「①優しい肯定的なもの(物:場 C ‘)②荒々しく異常な破壊的なもの(物:場 C ‘)③困難な天賦(物:場 C ‘)⇒からの關係:『④文學(D1)に、強引に眞つ正直に直結(D1の至大化)』『③を忠實にぶちまけた(D1の至大化)』⇒作品群の外見上の『⑤亂脈と言ふアイロニー(二律背叛)』(F:④の對立的概念)⇒⑤を必須とした(Eの至大化)事で〔⑥客觀視・距離把握・so called(Eの至大化)〕⇒安吾(△枠):①②③への適應正常」。

《原文一部》P303「坂口安吾は、まことに魅力ある人柄(物:場 C ‘)の持主であつた。何んとも言へぬ優しい肯定的なもの①(物:場 C ‘)と荒々しく異常な破壊的なもの②(物:場 C ‘)との微妙な混淆であつた。この人柄①②(物:場 C ‘)を、文學(D1)に、強引に眞つ正直に直結(D1の至大化)させたものが、彼が遺した仕事(D1)である。自分(物:場 C ‘)の困難な天賦(物:場 C ‘)を忠實にぶちまけた(D1の至大化)。全集の讀者は、彼の作品群の外見上の亂脈(F)が、この作家(△枠)が必須とした(Eの至大化)アイロニー(F:二律背叛)であつた事を合點する(D1の至大化)であらう」(評論『坂口安吾全集』)。